

「感謝をささげて」

サムエル記上 第1篇21節～28節
ルカによる福音書 第12章32節～34節

説教 村上修平牧師

今日は母の日です。聖書から一人の母親について読みました。サムエルの母親のハンナです。サムエルは、紀元前11世紀に活躍した預言者で、イスラエル最後の士師でした。このサムエルの母ハンナは、不妊のために夫エルカナとの間に子どもがありませんでした。もう一人の妻ペニナは、ハンナに子がいないことを恨ませようとしたので、ハンナは深く悩みました。しかし、ハンナはその悩みを主に祈りました。主の顔の前に、心を注ぎ出すようにして祈りました。「万軍の主よ、まことに、はしための悩みをかえりみ、わたしを覚え、はしためを忘れずに、はしために男の子を賜わりますなら、わたしはその子を一生のあいだ主にささげ、かみそりをその頭にあてません」。(サムエル記上1章11節)

そして、主はハンナの祈りに応えて男の子を授けて下さいました。ハンナはどんなに喜んだことでしょう。子どもを授かった喜びはもちろんですが、それ以上に、主が生きておられること、主は彼女を見捨てず、彼女の祈りに応えて下さる方であることを知って、主に感謝をささげました。ハンナはただ願い求めるだけではなく、主に感謝することを忘れなかったのです。ハンナは、主が男の子を授けて下さったら、その子を一生のあいだ主にささげるといふ、主との約束を覚えていました。ハンナはまだ幼いサムエルをシロの神殿に連れて行って、祭司エリに預けました。サムエルが主のご用に仕える人として成長するために、ハンナは主にサムエルをささげたのです。

しかし、ハンナはすぐにサムエルを連れて行かせず、彼が乳離れするまでは自分の腕で、母として精一杯の愛情を注いで育てました。当時イスラエルでは子どもが生まれて三年目の乳離れの時期に盛大な祝いをしたそうです。ハンナはこの三年間どのような思いで子どもを育てていたのでしょうか？ハンナにとってようやく授かった子どもは自分の命よりも大事な宝でした。この宝である子をあまりに早く手放すことに、当然ためらいがあったと思います。けれども、ハンナはこの子にとって何が一番の幸せか、親として出来ることは何かをずっと祈っていたと思います。そして、この子にとって最も幸せなことは、この子が神様の子どもとして成長することだと考えました。

ハンナは祭司エリに、「この子を与えてくださ

いと、わたしは祈りましたが、主はわたしの求めた願いを聞きとどけられました。それゆえ、わたしもこの子を主にささげます」(27～28節)と、献身の思いを言い表しました。

『ささげる』とは無くなることではありません。むしろ、ささげることでもっと豊かに受けるのです。主イエスは、「天に、尽きることのない宝をたくわえなさい」(ルカによる福音書12章33節)と教えて下さいました。天に、つまり神に私たちの宝をささげることで、私たちはもっと豊かな人生を生きることができるようになります。例えば、大阪教会の聖堂には高価なピアノがありますが、演奏者がいなければ高価なピアノもただの木の塊に過ぎません。しかし、素晴らしい演奏者がこのピアノを弾く時に、美しい音を奏でて聞く者を喜ばせるのです。私たちも、素晴らしい弾き手である神様に自分自身をささげる時に、持っている力を十分に発揮して、本来の自分らしく生きることができるようになります。

さて、サムエルの側からすれば、ハンナはどんな母親だったのでしょうか？生まれる前から自分を主にささげ、まだ幼い自分を神殿に連れて行った母を、サムエル少年は恨んだのでしょうか？サムエル記上2章には、ハンナが毎年手作りの上着をサムエルに持っていった(19節)ことが記されています。ハンナは離れていてもその心はいつもその子と一緒にいたのだと思います。この母の祈りが子に通じないはずがありません。サムエルはハンナの思いをよく受け止め、サムエルもまた母と同じように祈りの人として成長しました。イスラエルが敵に激しく攻められた暗黒の時代に、サムエルは神の御心に従って生きるように民を導く人となったのです。

《祈られた人》は、《祈る人》になります。今、私たちがここにいるのも、誰かが私たちのために祈ってくれたからです。人は自分からは神を求めないからです。誰かの祈りが必要です。私たちに神の愛を届けてくれた人たちの顔を思い浮かべ、感謝をささげたいと思います。そして、私たちも誰かのために、涙を流して祈る人にならせていただきたいと願います。

(記 村上修平)